

『伊朔譯評』と『東方伊朔』の対比研究

——拡張と解読をめぐって

喬 昭

A comparative study of *YiShuo YiPing* and *DongFang YiShuo*
Over expansion and decryption

QIAO Zhao

YiShuo YiPing and *DongFang YiShuo* are Chinese translations of Aesop's Fables, written by Chen ChunSheng. "*DongFang YiShuo*" was published in 1906, while *YiShuo YiPing* was translated into the following year 1909. Therefore, the research on *DongFang YiShuo* is represented by Kazuyoshi Sato (1999) "Introduction to Chen ChunSheng's "*Touhou Isaku*" Research-Focusing on Christianity". The translation shows the characteristic of utilizing Christianity and the Chinese transformation of Aesop. On the other hand, there are only a few studies on *YiShuo YiPing*, and there is plenty of room to examine the details and characteristics. Therefore, in this paper, we conducted a comparative study of *YiShuo YiPing* and *DongFang YiShuo*. Clarify the differences and their characteristics. We will analyze in detail the characteristics of the author, the connection of Chinese Aesop's Fables, how to make a parable title, and the use of emphasis marks. In addition, I am thinking of solving the question about Xiaoxiaozi (囂囂子), which is included in only one episode in *YiShuo YiPing*, in this chapter.

Keywords: Chen ChunSheng, Fables, Chinese Aesop's Fables, *YiShuo YiPing*,

DongFang YiShuo, Translation

キーワード：陳春生、寓話、漢訳イソップ、伊朔譯評、東方伊朔

はじめに

『伊朔譯評』と『東方伊朔』はイソップ寓話に関するものであり、作者は陳春生である。『東方伊朔』が1906（光緒32）年に出版され、それに対して『伊朔譯評』が1909（宣統元）年に編訳されたものである。漢訳イソップに関する研究は少なくないが、今までの研究は拙文（2020）「イソップにおける「西学東漸」—『伊朔譯評』と『意拾喻言』の対比から」以外には『伊朔譯評』は触れられていなかった。一方、漢訳イソップにおいて、同じ作者である陳春生の『東方伊朔』に関する研究は内田慶市（1993）「イソップ東漸—宣教師の「文化の翻訳」の方法をめぐって」と佐藤一好（1999）「陳春生『東方伊朔』

研究序説「キリスト教的性格を中心に」が代表的なものである。他に論文や書類には『伊朔譯評』の存在について言及していたが、詳細（内容と特徴など）は触れられてこなかった¹⁾。例えば、内田（2014）の『漢訳イソップ集』²⁾には「中国人の編者は陳春生という人であるが、この人についてはよくわかっていないが、上述『伊朔譯評』の編訳者でもある」と陳春生『伊朔譯評』に言及している。そのため、本稿では『伊朔譯評』と『東方伊朔』の対比研究を行い、両者の異同と特徴を明らかにするつもりである。

一、研究背景

中国では、最初のイソップ訳版は明時代にベルギー人ニコラ・トリゴー（Nicolas Trigault 1577-1628）が口述した『況義』である。この『況義』の原本については未解明な状態であり、現在判明したことはパリ国立図書館やオックスフォード大学ボドリアン図書館に所蔵されている4つの写本がある³⁾。この後は、主に、1840（道光20）年にロバート・トーム（Thom Robert, 1807-1846）の『意拾諭言』、1903（光緒29）年に林紓が訳した『伊索寓言』である。更に、20世紀前半には中国風イソップにも現れていた。本稿の主題とした作品の作者である陳春生が1906（光緒32）年に著した『東方伊朔』が代表的なものである。

また、中国の翻訳に関する歴史経過という点、西暦2世紀の仏典の翻訳と、16世紀末から17世紀にかけて宣教師によってもたらされた翻訳にまで遡る。アヘン戦争が終わるまでは、「西学東漸」という風潮が広がっていた。文学者や学者の間では、西洋の文化に関する翻訳活動が次々と出てきた。『伊朔譯評』は1909（宣統元年）年に上海協和書局によって最初に発行され、後に上海美華書館によって再発行されたイソップ寓話の中国語翻訳である。清朝後期のイソップ寓話の翻訳本として、多くの寓話が収められている。

二、『伊朔譯評』と『東方伊朔』について

1、『伊朔譯評』の基本情報

『伊朔譯評』には199話が含まれている。その内容は、序文、目次、寓話内容の順で構成されている。寓話のタイトルは統一された形式で、全部4文字である。筆者は天理図書館にしか所蔵されていない美華書館の第二版『伊朔譯評』を閲覧することができた。書は刻本であり、版の中心（版心）には「伊朔譯評」、ページ数、「通問報館刊」などの語が刻まれている。表紙は英語のタイトル「AESOP'S FABLES SECOND EDITION」、中国語のタイトル「伊朔譯評」、寓話の挿絵（左右で構成され、「狐と鶴」という寓話と見られる）、出版社と出版年（上海美華書館発行 宣統元年十一月再版）からなっている。寓話

1) 中国の学者である戈宝権（1913-2000）は『中外文学因縁』の中で『伊朔譯評』についても言及したが、詳細は及んでいなかった。

2) 内田慶市『漢訳イソップ集』「文化交渉と言語接触研究・資料叢刊3」、2014年、41頁。

3) 四つの写本は以下のとおりである：1) Chinois 9267 (Bibliothèque Nationale)；2) Chinois 9268 (Bibliothèque Nationale)；3) Chinois 9269 (Bibliothèque Nationale)；4) MS. Chine.19 (Oxford University Bodleian Library)。

の本文の後に「新書廣告」があり、裏表紙は純粋な英語で記述されている（以下の通りである）：

AESOP'S FABLES
IN MANDARIN
ADAPTED BY CHEN CHUN SHENG
POINTED WITH CHRISTIAN MORALS
INTRODUCTION BY
REV. D. MACGILLIVRAY, D.D.

Shanghai

PRINTED AT THE AMERICAN PRESBYTERIAN MISSION PRESS

1910

筆者の調査によると、出版年はさておき、天理版『伊朔譯評』と上海協和書局出版版（以下協和版と略称する）『伊朔譯評』の違いが4つある。第一に、天理版には表紙と裏表紙があること。第二に、天理版の序文は完全であり、協和版には季理斐（Donald MacGillivray 日：マクギリヴレイ、1862-1931）による英語の序文が欠けていること。第三に、天理版の本文の最後に「方記」（欄の外側）という語があること。第四に、それぞれ本文の後に「新書廣告」で紹介されている書誌版本は異なっているが、紹介した内容の詳細は同じである。また、署名のところにそれぞれ「上海北京路美華書館發行」（天理版）と「上海北京路協和書局發行」（協和版）があった。これにより、天理版『伊朔譯評』の情報の完全さに基づいて、この版を手本にして調査を始めることにした。

ここで注目すべきことは、「新書廣告」の内容から見えることと特徴である。中には、『伊朔譯評』に関する情報は以下のように述べられている。

△再版伊朔譯評伊朔一書。為希臘寓言家伊朔所作。相傳二千餘年。重譯數十餘國。迄今歐美各國。如家庭。如學校。如童蒙。如成人。如名士碩儒。無不視如米麥布帛。為一日不可少之書。茲由通問報館。擇其足以發明聖道。切合時事者。約二百首。譯為華語。繫以短評。與東方伊朔有互相發明之妙。誠家庭必備。訓蒙必需。傳道必講之書也。每冊價洋二角。寄費五分⁴⁾。

以上のように、『伊朔譯評』の版本は「再版」と記述されている。また、前文で説明したように天理図書館に所蔵されているこの版本は「SECOND EDITION」と書かれている。このことから、「新書廣告」の紹介は本の版本とつながっていることがわかっただろう。ここでもう一つの例をあげたい。台湾の中央研究院に所蔵されている『伊朔譯評』の「新書廣告」には以下のような情報がある。

4) 陳春生『伊朔譯評』、天理図書館 第二版、1910年。

△三版伊朔譯評 伊朔一書。為希臘寓言家伊朔所作。相傳二千餘年。重譯數十餘國。迄今歐美各國。如家庭。如學校。如童蒙。如成人。如名士碩儒。無不視如米麥布帛。為一日不可少之書。茲由通問報館。擇其足以發明聖道。切合時事者。約二百首。譯為華語。繫以短評。與東方伊朔有互相發明之妙。誠家庭必備。訓蒙必需。傳道必講之書也。每冊價洋二角。寄費五分⁵⁾。

このように、『伊朔譯評』の版本については「△三版伊朔譯評（後略）」と書かれている。上述の内容からみれば、「新書廣告」から版本を判明できると言えるだろう。一方、問題点は、現在中国国家図書館では「伊朔譯評 宣統元年出版」という情報が公開されている。実際に本物を確認したところ、1929（民国18）年に出版したと見られ、「新書廣告」は「第四版伊朔譯評」と示されていた。このような問題については図書館のデータ記入のミスではないだろうかと考えられ、公開されている本の出版情報は事実と相違する場合がある。筆者の研究は『伊朔譯評』の諸版本や出版情報に関し、正確な情報を集める段階にある。管見の限りでは『伊朔譯評』に関する情報は以下のようにまとめられる。

表1

版本情報	出版時間	所 蔵	出 版	注
不明	不明（序には宣統元年と記入されている）	内田架蔵	上海協和書局	「新書廣告」により、第四版と見られる。
第二版	1910 宣統元年十一月再版	天理図書館	上海北京路美華書館発行	筆者の調査により、44頁と45頁には二重印刷がある。
『伊朔譯評』 第三版	1913 民国二年	中央研究院	上海北京路美華書館発行	
未見	1913 民国二年	东海大学		
初版？	1909 宣統元年	中国国家図書館	上海北京路協和書局発行	情報不備 (実は第四版と判明される)
初版？	1909 宣統元年	香港中文大学	上海北京路美華書館発行	情報不備 (実は1929年と判明される)

2、中国風イソップ『東方伊朔』について

『東方伊朔』は1906（光緒32）年に上海美華書館によって出版されたものである。呉板橋（英：Woodbridg、日：ウットブリッジ、1856-1926）の序文によると、『東方伊朔』は *The Chinese Christian Intelligencer*（『通問報』）に連載されたものを一冊にまとめたものである。この情報については、第百九十二回の「論説」欄に「東方伊朔 序言」が載せられ、タイトルの下には「原名喻道瑣言」という説明文があることが確認できた。

また、『東方伊朔』を著した陳春生は『通問報』の編集長を務めていた。『通問報』は1902（光緒28）年5月に上海で設立されたキリスト教の出版物であり、キリスト教系新聞である。通問報社によって編

5) 陳春生『伊朔譯評』、台湾中央研究院 第三版、1913年。

集され出版されたもので、「廣協書局」から発行されていた。本来は週刊誌であったが、1942（民国31）年に月刊誌に、1944（民国33）年に季刊誌に変更された。英語の誌名は「The Chinese Christian Intelligencer」であるが、1934（民国23）年7月から、サブタイトルは「Christian Family News」に変更された。そして、1950年に停刊した。

さて、『東方伊朔』（計151話）は中国固有の古典を利用し、列子、莊子などから話を取りながら書かれている。内田（1993）によると、『東方伊朔』の内容は道徳的、教訓的なものであると述べられている。中には、「留聲器」、「鐵路」、「德律風」⁶⁾（「善人為寶」）などの語もあちこちに見られるのが特徴である。また、「透物光」、「照像法」なども挙げられる。そして、「編輯大意」の内容により、この本はキリスト教の宣教のために、聖書を多めに引用したものである。さらに、「官話文理之過渡也」と書かれて、文体が明確に位置付けられている。『東方伊朔』は中国風イソップと言われて、ギリシャの寓話に中国の衣装を着せ、中国文化にふさわしいものとなっている。宣教のためであっても、聖書ばかり引用するのではなく、中国の特徴があるものを使って、より一層文化の受容を体現させているようである。また、内田（2014）が指摘した通りに、『東方伊朔』は西洋文化の中国文化への同化」の一つの典型であると感じられる。

『東方伊朔』の版本情報については、現在関西大学に所蔵されているものは光緒三十二年（1906）に出版された初版である。また、内田架蔵の版本は1908（光緒34）年に出版され、「新書廣告」の情報からみれば、第4版であると推測される⁷⁾。二つの版本について、異なるところが2点ある。それは初版の『東方伊朔』は「新書廣告」と英文の後記が欠けていることである。1908（光緒34）年版の「新書廣告」には「四版東方伊朔」、「再版五更鐘」と「再版強盜洞」の広告があり、後記の英文の内容は以下の通りである。

Rev. R. T. Bryan, D.D., President of the Baptist Theological Seminary at Shanghai, says of "Eastern AEsop's Fables" : -

"Mr. Chen Chunsheng has presented me with a copy of his book, "Eastern AEsop's Fables." I have not only enjoyed reading it, but have also found it a most excellent and instructive book for the study of the Mandarin dialect.

It is rich in terse and idiomatic expressions, made easy to remember by the interesting fables in which they are used.

It is also a very valuable help to the preacher in furnishing him with a good supply of illustrations peculiarly adapted to the Chinese mind.

It give me great pleasure to recommend most heartily this book to all who are interested in the study of the Chinese mind and language.

I also congratukite Mr. Chen upon his success in making his language so easy that it will be

6) 「善人為寶」という寓話の中にある。

7) 参照情報として、1910年に出版された第二版の『伊朔譯評』の「新書廣告」には「五版東方伊朔」の情報がある。

a pleasure to all who use his book to study the Chinese language.”

このように、Rev. R. T. Bryan, D. D. (日：ブライアン、中：萬應遠、1855-1936；南美国浸信傳道部 SHANGHAI)⁸⁾ は陳の『東方伊朔』が中国語を勉強するための優れた資料のような存在だと評価した。また、陳が優しい言葉で寓話を創作したところも高く評価している。

三、『東方伊朔』の拡張について

1、イソップの翻訳と教訓における特徴

『伊朔譯評』と『東方伊朔』はどのような相違点があるのかをこの部分で分析する。まず、両者共通の特徴は「伊朔」という名前である。イソップを中国語に翻訳した名前は幾つかあるが、周知の通りに『伊索寓言』、『意拾喻言』、『伊氏寓言』などの訳版がある。しかし、陳春生はイソップを「伊朔」と翻訳し、寓話集の名前としてつけていた。なぜそのように名付けられたかについて、拙文(2021)「『伊朔譯評』に見られる陳春生の宗教観」⁹⁾で検討していた。概要は以下のようにまとめる。

陳氏は最近、純粋な中国の寓話本の『東方伊朔』を出版した。最初の二文字はオリエンタル(東方)、後半の二文字はイソップを意味する。つまり「東方イソップ」と翻訳できる。この名前は、B.C.160生まれの有名な中国人、東方朔の「Tung Fang So」に基づいている。この本は、外国人及び中国人に必要な書籍であった。と彼は疑わず、この新しい挑戦をし、大きな成功を抑えている。

陳春生は「東方朔」という人の名を借り、中国版イソップの名前を命名した。東方朔は紀元前154年-紀元前93年の人であり、前漢の武帝時代の政治家と中国の歴史における非常に有名な人物である。そして、唐代の詩人李白は彼のことを「世人不識東方朔、大隱金門是謫仙」と褒め称えている。また、滑稽な行為をすることでも知られ、中国では相声(中国式の漫才のようなもの)などのお笑いの神様として尊敬されている。

以上のような理由が考えられ、陳春生がイソップを「伊朔」と翻訳し、『東方伊朔』と『伊朔譯評』両方のバージョンで「伊朔」を使用した。「伊朔」は音訳とも考えられるが、結局音訳に意識をくわえて考慮したと考えられる。以上の分析を通して、陳春生は確実に歴史上の人物を引用し、その文化方面の要因を考えた上で、最終的に独特な名前に設定した。今までの研究や漢訳イソップの各版本を振り返ると、いわゆる「伊朔」と言えば陳春生が思い出されると言っても過言ではないだろう。このようにイソップにおける独特な翻訳手法・命名方法を両方にて使われていることは共通の一点である。

8) *DIRECTORY OF Protestant Missionaries IN China, Japan & Corea FOR THE YEAR 1910* Library of the YALE DIVINITY SCHOOL New Haven, Conn. the hongkong daily press office des vceux road, hongkong, and 131, fiect street, london, e, c, MDCCCCX pp11. また、萬應遠と陳春生が共著したものがあり、『講道要訣』(1912)という作品である。

9) 喬昭「『伊朔譯評』に見られる陳春生の宗教観」文化交渉 東アジア文化研究科院生論集第11号、2021年、3-14頁。

また、両方の教訓にもう一つの特徴がある。陳春生は「知白子」¹⁰⁾と自称し、『伊朔譯評』と『東方伊朔』の教訓における特色は「知白子曰」と始まる陳の評論または教訓にこそ存している。そして、書物だけではなく、陳は映画分野でも「知白子」という名前を使っていた。映画台本の編集者として、1924（民国13）年3月に上映された『大義滅親』のメインクリエイターリストの中にも「知白子編」¹¹⁾と記されていた。陳は「知白子」の名で異なる分野に活躍していた¹²⁾。

2、寓話のタイトルについて

『伊朔譯評』と『東方伊朔』の寓話は両方とも四文字のタイトルであり、各199話と151話がある。そして、同じく序文からタイトル、それから寓話の内容との順番で展開されている。各寓話のタイトルから見れば、同じものが一話もないし、同じく「伊朔」の名前を使っても、全く違う寓話集である。

しかし、『伊朔譯評』は『東方伊朔』より平明でわかりやすいと考えられる。また、寓話は登場させた動物の対話、行動などに例を借り、深刻な内容を持つ処世訓を印象深く大衆に訴える目的の話である¹³⁾。という解釈から、教訓又は寓意を一般人に伝えるために、特に知識量が少ない子供や婦人たちに伝えようとする場合、『伊朔譯評』のほうがわかりやすいと認められるだろう。それは具体的にタイトルの内容を分析した上で、まとめることができる。さて、ここで『伊朔譯評』と『東方伊朔』のタイトルの例を挙げてみよう。

表 2

『伊朔譯評』	孔雀求歌	馬夫刷馬	狼坐羊罪	獅熊爭食	鵝生金蛋
『東方伊朔』	星火燎原	不言而喻	不知己過	損人利己	自相矛盾

このように、寓話のタイトルを見れば、子供や平民たちに興味をひかれやすい「孔雀求歌」、「馬夫刷馬」、「狼坐羊罪」などはより良いのではないだろうか。それに対して、「不言而喻」、「損人利己」と「自相矛盾」などの既存する四字熟語は文字自身に深い意味があり、タイトルになっているものの、文字だけを見たら、深く考えなければならぬだろう。それゆえ、寓話のタイトルを見て、その文字上の意味を理解するまではもう一步の進化が必要となり、さらに内容と寓意が感じられる。そして、人によってその寓話に対して理解しにくい場合が非常に多いと考えられる。

10) 老子の言葉には「知其白、守其黒、爲天下式」という説があり、白（輝き）を意識し、なお黒（暗さ）を保つその人は、天下の範となると訳している。それは、「知白」が「清廉潔白を知る」こと、「守黒」が「世の中に交わる」ことを意味している。世間の汚濁や誘惑にあっても、清廉さを保つ中に徳が増していくと言う事である。白を知りて、黒を守る、雄を知りて、雌を守る。何かを成すにあたり、その一点だけではなく客観的に、全体的に視点を置き、事に処せよ、という事だろうか。ただ、「知白守黒」、「知白守墨」は、書法においても、文字、余白のバランスの良否を言う大事な概念として捉えられている。すなわち、バランスは大事である。

11) 黄徳泉『当代电影』（中国電影芸術研究中心100082号）、61頁。

12) 詳細は拙文（2020）「陳春生の生涯と著作」を参照ください。

13) 『第六版 新明解国語辞典』三省堂、2005年。

『伊朔譯評』では動物の名前を借りて、寓話のタイトルを命名したが、それはイソップの特徴でもあるが、陳が『意拾諭言』をモデルにして作られていたものだからでもある¹⁴⁾。動物や自然現象などを使い、タイトルの優しさが表れ、誰でもよくわかるタイトルを作ったことにより、読み手にとっては改めて寓意や教訓を考える必要がなくなった。一方、『東方伊朔』には中国寓話の特徴があり、陳蒲青(1992)が指摘したように「(中国) 古代作家寓言有三个突出的特点：在题材上，以人物故事为主。……寓言中很少带有神话外衣(拟人化)的動物故事。第三，多採用人物故事(特别是历史故事)作为寓言题材。」¹⁵⁾ 中国風のイソップとして中国固有のものにイソップの衣装をかぶせており、このような方法は西欧文化の輸入手段であると認められるだろう。つまり、『伊朔譯評』の寓話のタイトルは分かりやすいが、『東方伊朔』のタイトルは歴史的な意味が深く、中国風に変容された特徴がある。そして、タイトルの内容が相違していても、その四文字タイトルの作り方は陳春生の創作上の特徴を表しているのではないだろうか。また、『伊朔譯評』の序文には以下のような内容が述べられている。

今之救國者。莫不以開通民智。啓迪人心。改良風俗。昌明教化。而亟亟於著書立說為主義。然欲求其言之簡而該。詞之情而新。意之淺而明。意之精而切者。該不多見。惟予讀通問報附刊之小說。如五更鐘強盜洞喻道瑣言。理非虛懸。語皆確鑿。其有益於世道人心者。固非尋常之著作家比也。無怪其書一經出版。海內爭觀。

—『伊朔譯評』序文陳金鏞

(拙訳：今、国を救う者は民衆の知恵を開くこと、人々を啓発すること、また、風俗を改めること、明晰な教育などを目標とし、著作を手段として国民救済をするかもしれない。しかし、書いた内容は簡単であり、言葉に新鮮感と感情を含み、意味は浅くはつきりし、しかも正確に表現することは稀に見える。しかし、『通問報』の附刊小説を読んで、例えば『五更鐘』、『強盜洞』、『喻道瑣言』といったものは、道理が深く、言葉が確実であり、民衆に有益な著作である。それは一般の作者が比較されるレベルではないほど素晴らしい。さすがに彼の本であるが、出版されるやいなや、国内外の人々がその書物を競うほど読みたがっていた。)

このように、イソップ寓話は元々ギリシャの伝説であり、多少本国の文化にも影響を受け、ギリシャなりの意味が存在していると思われる。陳春生がイソップ寓話をよく理解しただけではなく、当時の文化と繋がり、一般庶民でもわかりやすい話を作って、それなりの評論を書いた。たとえ読者が政治家であれ、一般人であれ、さらに子供であっても、その寓話を読むと容易に受け取れるのではないだろうか。この特徴は陳訳イソップが愛読された証拠・理由でもあると考えられる。

14) 『伊朔譯評』と『意拾諭言』の関係については拙文(2020)「イソップにおける「西学東漸」—『伊朔譯評』と『意拾諭言』の対比から」を参照してください。

15) 陳蒲青『寓言文學理論・歴史與應用』、板橋：駱駝出版社、1992年、197-198頁。

3、記号と傍点の活用について

本稿では『伊朔譯評』と『東方伊朔』の対比研究を行いながら、『伊朔譯評』は『東方伊朔』を拡張したという視点をめぐって分析したい。ここで記号と傍点の活用について、『東方伊朔』の最初にある「編輯大意」の内容を検討したい。

伊朔爲希臘名家。其書傳二千五百餘年如新。蓋其言雖諧謔。義實精深。西人訓蒙。多取其說。然以之移用於中國。每多圓鑿方柄。格格不相入。本書特仿其例。摭拾我國史記。通鑑。左傳。莊子。列子。淮南。韓非。說苑。孟子。山海經。呂氏春秋等等。而爲是冊。固有是名。

(略)

西國訓蒙之書。最重淺顯。中國訓蒙之書。每喜深奧。此書特易深奧之文。成淺顯之話。以之教授婦孺。事半功倍。讀畢此書。再以文理書證之。子易了了。此書乃官話文理之過渡也。

書中所述各事。皆本諸中國經史子集。無一杜撰。閱者幸致意焉。

書中遇有人名。則以單線爲號。遇有地名。則以雙線爲號。遇有註解。則上下以半弧爲號。

書中所繫按語。均急就章。未免有罅漏之處。閱者諒之。

光緒三十二年暮春之初潤州陳春生自記¹⁶⁾

以上のように、『東方伊朔』の「編輯大意」から見ると、その151話の寓話はすべて中国で起こった事実を基に作られた寓話集である。「伊朔爲希臘名家。其書傳二千五百餘年如新。蓋其言雖諧謔。義實精深。西人訓蒙。多取其說。然以之移用於中國。每多圓鑿方柄。格格不相入。本書特仿其例。(略)而爲是冊。固有是名。」という内容から、『東方伊朔』はイソップ寓話という構成を借りて、中国自らの説話を基にした中国人がわかりやすい寓話集であることがわかった。このような編集は中国風イソップの様相を表している。

イソップ寓話は数多くの翻訳版があり、その国の文化にふさわしい内容に工夫され、陳春生はイソップ寓話を中国人に対して簡単に理解できる文章に変更しようと考え、『東方伊朔』を研鑽し文学作品として発表した。そのタイトルの「東方」は中国を指している¹⁷⁾。一方、前文で述べたように『伊朔譯評』はほとんど動物を比喩体として作られたものである。動物を使って浅い日常の事情を説明し、そして教訓で評価を表現する方法は読者にとっては非常に理解しやすいだろう。これは西洋寓話と中国風寓話の異なる点に見えるのではないだろうか。

また、陳の作品にはもう一つの特徴がある。それは『東方伊朔』の「編輯大意」の中にはまた「書中遇有人名。則以單線爲號。遇有地名。則以雙線爲號。遇有註解。則上下以半弧爲號」という記述があり、この内容に注目すべきである。この標点記号は古籍の一般表記でもあると考え、『伊朔譯評』と『東方伊朔』の両方で使用されている。これはイソップの他の翻訳版と比べると、陳の作品にしか記号がつけら

16) 『東方伊朔』別名『喻道瑣言』上海美華書館に発行された書物である。この部分は序言からそのまま引用された部分である。

17) 天理図書館所蔵している『伊朔譯評』序文の内容である／からわかる。上海美華書局、1910年（再版）。

れていないことが創作上の特徴であると認められる。さて、具体的な例を以下のように挙げる。

牝羊生鬚

牝羊苦求天神。賜他生鬚。天神當即應允。殺（音古牧羊也）羊大怒。乃求告天神說。他是牝羊。何以生鬚。將來不是牝牧不分嗎。天神說。這不過是有名無實的事。他雖然生鬚。氣力还是不如你大。你可放心罷¹⁸⁾。殺羊无言。

知白子曰。中國與西國通商以來。明明與地割與人。必要說租借。（如九龍威海衛膠州灣是）明明以地賣與人。必要說是永租。（如各地租界是）嗚呼。所爭的是浮文。所失得的是實際。

—『伊朔譯評』

東施效顰

中國從古以來。美貌女人。當算是吳王的妃子西施爲第一。西施素有心病。每逢發病之時。便蹙了眉頭。鄰家有一女兒。名叫東施。見他發病蹙眉的時候。甚爲美貌。也常常學他捧心蹙眉的樣子。他但知道蹙眉是好看。却不知道蹙眉之所以好看了。

知白子曰。現在中國有等人。事事效法西人。或是改換洋裝。或是剃去髮辮。或是學飲洋酒。學吸香烟。專學西人的皮毛西人的癖病。這真是東施效顰了。

—『東方伊朔』

以上の例文のように、陳訳イソップの中には記号は少なくない。また、記号は全部文字の横につけている。陳は『東方伊朔』の「編輯大意」において、地名、人名と国の名前について詳しく説明した。さらに、『伊朔譯評』の内容にも同じ記号がある。しかし、『伊朔譯評』の中には記号として、「°」、「ゝ」、「|」、「||」、「()」といった五種類がある。そして、「°」と「ゝ」を活用していたところが多く、合計171話に見られる。『伊朔譯評』の86%を占めている。一方、『東方伊朔』には中国の古典をたくさん引用したため、地名を表す「||」と人名を表す「|」がほとんどに使われていて、「°」マークが以下図1と図2のように、二箇所だけに表記されている。

18) 本稿で引用した『伊朔譯評』と『東方伊朔』の原文は縦書きであるため、傍点「ゝ」で示されている所を太字で表す。

表3 『伊朔譯評』における傍点の活用

タイトル	傍点「。」	傍点「、」
狼坐羊罪	人在這強權的世代。欲圖自存。必先要自強。	你姥爺飲水是在上流。小的是在下流。小的豈有攪渾姥爺飲水的道理。老爺莫認錯人。小的是今年春天纔出世。那有去年欺侮老爺的道理。羊未及置辯。已被狼一口噬殺。作了他的腹中物了。
獅熊爭食	與其爭鬪到這種地步。一無所得。何如早點公公道道的對分呢。	以致涉起訟來。經年累月。糾纏不已。使得差役從中發財。兩下皆是傾家蕩產。毫無所得。豈不是愚之極嗎。
鵝生金蛋	總要忍心耐性。按部就班。自然漸漸的就會發達起來。	一旦事情敗露。聲名狼籍。却反弄得一個錢不值。
田夫救蛇	若是不分善惡。不分好歹。恐怕善事反而成功惡事。救人反而成功害人。	便活轉過來。就在田夫的胸膛。咬了一口。一時毒氣攻心。傷了性命。

そして、『伊朔譯評』の中で数多くの物語が傍点「。」と「、」で記されたが、表3のように挙げられる。その特徴を纏めると、予想した通りに、「。」は一般の注意点や詳しい教訓を現す文を示している。一方、「、」はマイナスな意味、あるいは皮肉な意味を強調していることが実証されると言えるだろう。

以上、『伊朔譯評』の内容と具体的な例を分析したが、記号の意味と傍点の特徴から見ると、記号や傍点があるから、読者がはっきり寓意を判断できるようになった。たとえ子供であっても、寓話を読む際に、自分がどのような大人になるわけか、そして、どのようなことはダメなのかを考えさせ、寓話の意味も非常に受け入れやすくなる。もちろん、大人としてもこの寓話を読む際に時代性や教案などは記号で示されたから、自分の生活または政治に関することも考えられるだろう。

4、「囂囂子」を解釈する

ここまでの検討において、イソップの翻訳、教訓の特徴、また記号や傍点の活用といった方面から『伊朔譯評』と『東方伊朔』を比較した。さらに、『伊朔譯評』の内容を分析した際に行った疑問をこの節で解決しようと考えている。拙文(2021)「陳春生『伊朔譯評』に見られる宗教性の諸相」で論じたように、『伊朔譯評』の中には1話しか使っていない「囂囂子曰」がある。本章の第一節で説明していた通り、教訓における「知白子曰」は『伊朔譯評』と『東方伊朔』の両方ある特徴である。そこで、1話のみ異なる表現で使用した理由をここで検討していきたい。

まず、『伊朔譯評』の教訓における「囂囂子曰」の内容を挙げる。

鼓手委過

戰陣的時候。大概是以鼓聲進。以鑼聲退。這是中外通行的古法。古時某國的軍隊。因打了敗仗。鼓手也被敵兵生擒過去。將就要殺。古手乃哀求道。我不是執刀執槍的兵卒。從未殺過一個人。不過只在陣上敲鼓而已。豈能定我是死罪呢。敵將道。你雖然沒有膽量。衝鋒破銳身臨前敵。但反在躲在後面。任意鼓弄催人上前。豈不是罪更加重麼。竟將鼓手推出殺了。

囂囂子曰。世上有等人。專門聳人作惡。且又自己不肯居惡人之名。每到受報時。便諉為無罪。殊不知被聳行惡的人。不過一時直性。受人愚惑。那種種惡蹟。皆是那假善人主謀出來。可知聳人作惡的人。真真陰險萬壯之梟雄了。所以。孔子作春秋一書。於為臣的不肯放寬趙盾。於為子的不肯放寬許

止。皆說他是弑君弑父。就是這宗誅心之法了。俗語說。借刀殺人。真可爲鼓手引証。

このように、「鼓手委過」の教訓で「囂囂子曰」が使われている。筆者はこの点について最初の推測は拙文（2021）「陳春生『伊朔譯評』に見られる宗教性の諸相」の中で言及したが、さらにこの問題を明らかにしたい。

この1話の寓話の内容から見れば、自己呼称ではなく、別人名などを引用するという点で、注目に値するものだと言える。あるいは、単に「囂囂」¹⁹⁾の文字通りの意味を示しているとも言える。これを通じて自分の感情を表そうとした可能性があると考えられる。

この問題を検討するには、『東方伊朔』の序文に注目すべきである。

東方伊朔贈詞并序

竊謂心法相通。大道奚虞夫隔閼。指歸攸賴。士民待化其愚柔。此伊朔名篇。遺簡越二千年弗敝。而斯文光線。環球被七萬里之遙。其效果有如斯。誠譽榮不朽矣。然而寓言八九。蒙莊亦擅詼奇。遊戲大千。曼倩偏工譎諫。我東方歷史。類載綦詳。彼西學名儒。焉容涵蓋。以故我友陳君。獨善師法諸子。胸有成竹。舌妙粲花。崇拜遑論希臘。自墨舞以筆歌。觸手無不生春。更條分而縷晰。而況葫蘆依盡。貯來鐵血尤多。詎教梨棗為災。務使石頭盡點。夫亦醒世之良箴。探源之秘鑰歟。僕托跡書傭。傾心筆削。第貢蕪詞。何當瓣祝。尚冀元龍百尺。涵容拓湖海襟期。敢誇倚馬萬言。聲價助洛陽紙貴也。

泰西哲說早蜚名。戶誦家絃率奉行。那可今無司鐸者。為吾學界播文明。元龍豪氣未能除。學海汪洋縱所如。抉擇名言譚道蘊。是真過渡一奇書。雖自平平淡淡來。不矜意氣不矜才。就中却蘊無窮秘。要使同胞弭禍胎。筆妙生花語解頤。幾攄熱血那能知。關心惟向前途告展。卷無忘發起時。聞道東方有幾星。也工譎諫翊明廷。而君括取微言旨鼎足而三列作銘。維新守舊激風潮。若個人夫見獨超。我愛君偏耽道味。菹醢醢史作羹調。非儒非佛亦非仙。祇解從容述古賢。莫作尋常諸說看。謂儂鵲突信談天。志在莊襟老帶間。一言勘破石驚頑。空山花雨紛紛落。說法如君未等閒。當頭棒喝警痴聾。懲勸還教樂易從。勝被五更鐘喚醒。底君猶著五更鐘。只今歌罷意如何。自笑依然被墨磨。縱許微名能附驥。此生終悔太蹉跎。

光緒丙午仲春

古潤囂囂子嚴霽青率作於申江澄觀寄廬

以上のように、「學海汪洋縱所如。抉擇名言譚道蘊。是真過渡一奇書。（拙訳：周知のように学習は無限であり、陳は生涯学習のうちに有益な知識を習得し昇華した結果、古今文化・知識の遷移にある優れた書を作った。）」や「非儒非佛亦非仙。祇解從容述古賢。（拙訳：儒教でも仏教でも仙人でもないのに、自分なりに古代の賢明な人を詳細に解釈していた。）」ということから、『東方伊朔』を高く評価している。また、この「光緒丙午仲春 古潤囂囂子嚴霽青率作於申江澄觀寄廬」の署名から「囂囂子」が指摘されていると考えられる。この序文の内容を手がかりに周辺資料を検索したら、具体的な人物像を検証で

19) 『大辭林』三省堂 第三版 2006年。「囂囂」というのはやかましいさま、さわがしいさまである。

きた。

さらに、筆者の調査によると、上述の『東方伊朔』の序文で示した内容以外、他にも「囂囂子」は誰かを解釈できる例を挙げたい。以下の表4にまとめている。

表4 嚴霽青に関する文章

作品名	出典（雑誌名）	署名
「囂囂子狂歌（早年作）」	『真光雑誌』1934年第33卷2期45-46頁	嚴霽青
「戒纏足文（仿阿房宮賦體）」	『通問報』の第一百八十四回の「論説」欄	古潤嚴霽青
「聖誕聯語一束」	『通問報』1926年「詞林」欄	嚴霽青
「浸會來華百年中的我」、「紀念鎮江已故郭維義牧師」、「紀念揚州浸會故牧畢爾士」	『真光』第三十五卷第十號	嚴霽青
讀大光報緣起書後	『通問報』の第五百十二回の「他山之助」欄	嚴霽青

表4のように、一つ目は「囂囂子狂歌（早年作） 嚴霽青」²⁰⁾という作品の署名から判断できると考えており、二つ目は『通問報』の第一百八十四回の「論説」欄には「戒纏足文（仿阿房宮賦體）古潤嚴霽青」という内容から判断できると考える。「古潤」は地名であり、陳の出身地「潤州」との関係が推測できるだろう。また、「囂囂子」は嚴霽青の自称であることがわかった。

この「囂囂子」と陳春生の関係に関する疑問を解決するために、筆者が上海図書館の『全国報刊索引』を調べたところ、以下のような内容がわかった。



人 本 生 先

図3 本報文藝撰述員嚴霽青先生全家玉照（先生本人）²¹⁾

悼嚴霽青先生

本誌特約文藝撰述 嚴霽青先生，於舊歲十一月三日，病故於鎮江其親戚吳鎮生君家，敝誌同人，聞訊之餘，不勝悼惜！查 嚴先生詩才豪放，不善謀生，故一生貧窘，死後亦甚蕭條。惟 嚴先生生平能

20) 「囂囂子狂歌（早年作）」『真光雑誌』1934年、第33卷 第2期、45-46頁。

21) 『真光雑誌』1935年、第34卷 第4期、1頁。

本其愛 主愛人之熱忱，利用所長，寓道於詩詞之中，以宣傳福音，培人性靈，以立不朽之功，亦難能而可貴之事業也。嚴先生與真光發生關係，已有十餘年之歷史，惟記者就任真光職務日期尚淺，且適值國難，故與嚴先生尚無以免之緣，而所知嚴先生之生平亦甚少，殊引為憾！記者近曾請同事盡錄嚴先生所著關於闡揚宗教之詩章，預備給嚴先生親自校閱有無錯誤，或有需修正之處，俾留為出版專冊之用，孰料以戰事關係，郵局不收掛號寄遞，故未發寄該錄稿，豈知不數日，即接得嚴先生之噩耗，悼惜何如！聞嚴先生去世時，其家人均逃難在外，至今仍無消息，身後事均由其親戚吳鎮生君料理，云。茲敝社擬彙集嚴先生之生平著作，印成專冊，以留紀念，而勵後人。謹敘如上，一方面藉以報告嚴先生逝世之消息；一方面用申追悼嚴先生之微忱。

— 『真光雜誌』1939年第38卷1期1頁。

以上のように、嚴霽青は陳春生と同じ出身地であることがわかった。また、『真光雜誌』との関係は時間長く、当時の有名人であったという情報がある。「記者近曾請同事盡錄嚴先生所著關於闡揚宗教之詩章」という記述から、嚴霽青は宗教的詩を作っていたことも陳春生に尊敬される可能性があり、あるいは二人がいつも意見相当などの原因で陳は『伊朔譯評』の中に唯一の「囂囂子曰」で嚴の思想をアピールしたと推測できる。

おわりに

以上、『伊朔譯評』と『東方伊朔』に関する研究を詳論した。詳細な内容に基づき、『伊朔譯評』は『東方伊朔』を拡張したという視点を巡って解読した。例えば、「Aesop」の翻訳と教訓における特徴、またタイトルの異同等をはじめ、細かい分析を通じて『伊朔譯評』と『東方伊朔』の対比研究を行った。

本稿は『伊朔譯評』と『東方伊朔』の一部分の基礎情報を中心に説明した。基礎的な説明であるが、両者の内容は細かい相違が少なくない。拡張というより、表裏一体の関係だと言える。例えば、『東方伊朔』は中国の古典話を引用するだけでなく、「留聲器」、「徳律風」、「透物光」、「照像法」といった西洋の語を引用したり、「淮南子」、「韓非子」、「列子」などの話を寓話の本文やタイトルに設定したりしている。『伊朔譯評』は動物談を中心に、平易な言葉遣いで道理を説明しながら、時代性のある教訓や傍点の活用などにより、一般民衆の啓蒙を重視している。さらに、本稿の分析を通じて、「囂囂子」についての問題を明らかにした。『伊朔譯評』と『東方伊朔』いずれも当時代における翻訳作品にて「民族の融合、新たな知識の吸収、国民に対する啓蒙、社会変革の実現」という価値観によって支えられ、社会性を持った一種の武器であったといえよう。また、作品の対比研究から陳の翻訳における特徴が見られるだろう。それは内田（1993）が指摘した通り、「『東方伊朔』はモリソンの翻訳観が最終的に行き先ではなかったか」と思え、それを拡張した『伊朔譯評』も文化的翻訳というモリソンの翻訳観を踏襲していると考えられる。

